産経新聞　令和元年（2019年）8月10日　土曜日　12版　社会　22

身を挺した父「子供は見逃して」

忘れられた同胞 ㊥

フィリピン残留2世

「全ての日本人が、フィリピン人の敵になった」。フィリピンのパラワン島南部にある田舎町、リサールに住むフリオ・オオシタさん(89)は、運命が一変した1942年6月23日のことを、今も克明に覚えている。

木材会社の社員として働いていた父、マツイチさんは20歳になる前にフィリピンに渡り、結婚。フリオさんを含め、10人もの子宝に恵まれた。

前年の41年に日米が開戦し、まもなく日本軍がアメリカの植民地だったフィリピンへ進攻したことで、日本人移民をめぐる情勢は急激に悪化していた。マツイチさんは同年末、リサールの隣町、ブルックスポイントで理由もなく警察に身柄を数カ月間拘束され、現地のフィリピン人警察官に護衛されて戻ってきたばかり。当時はブルックスポイントから避難してきた「イワオ」という姓の日本人一家と一緒に生活していた。

ゲリラ襲撃、銃声

当日午後7時ごろ、水をくみに外に出たイワオさんが突然、4人組の男に銃撃された。反日ゲリラの襲撃だった。〝犯人〟の中には、マツイチさんを護衛してきた警察官も含まれていた。

混乱の中でフリオさんらは別の家に逃げ込んだ。身を潜めていると、外でマツイチさんが「自分は殺されてもいいから、子供だけは見逃してくれ」と襲撃犯の男たちに懇願する声が聞こえた。その後、銃声がとどろき、男たちはフリオさんらの自宅の中を物色して去った。混乱が収まり、外に出ると、マツイチさんとイワオさんが倒れて死んでいた。

戦後、周囲で「日本人の子供も殺される」という噂が立つこともあった。危険から身を守るため、イワオさんの娘、ホセフィナ・イワオさん(82)は、母方の親類の姓「モレノ」を名乗って暮らした。一方、農業や漁業で生計を立てたフリオさんの一家は「オオシタ」姓を使い続けた。

「ずっと日本人だと思い生きてきた。危険はあったが、この名前は日本人の父がここで生きた証しだから」

身元探し 記憶以外に証拠なく

父の身元探しを続けているフリオ・オオシタさん（右）。左は身元が判明したホセフィナ・イワオさん＝7月2日、フィリピンのプエルトプリンセサ市　（橋本昌宗撮影）

戦争で書類焼失も

ホセフィナさんとフリオさんは、ともに父の身元探しを続けた。先に見つかったのはホセフィナさんだった。現在の大分県杵築市に本籍がある「岩尾久衛」が父と判明した。日本国籍も取得できた。

フリオさんは、いまなお身元が分からないままだ。

日本国籍を取得するには父の戸籍に登録する「就籍」の手続きを日本の家庭裁判所に申し立て、認められる必要がある。NPO法人「フィリピン日系人リーガルサポートセンター(PNLSC)」によると、就籍には「父が日本人であること」「父と母が結婚していたこと」「2世が父の子であること」を証明しなくてはならず、両親の結婚証明書や2世の出生証明書などの公的書類が有力な手がかりになる。

こうした書類は通常、フィリピン国内の役所や公文書館、教会に残されているが、戦争で焼失しているケースが少なくない。2世は日本人の子だという出自を隠して暮らした人も多く、貧困生活を余儀なくされ、紛失したり捨ててしまったりした例もある。結婚がイスラム教や地元部族の慣習で行われていると、記録自体が残っていないといい、2世や関係者の記憶をたどって証言を集める必要がある。

ホセフィナさんの父親の身元が判明したのは、ホセフィナさんが教会で受けた洗礼証明書がきっかけだった。一方、フリオさんの場合、父の名前が「オオシタ・マツイチ」で出身が長崎だという記憶以外に証拠は残されていない。

フリオさんは昨年末、現地の日系人会を通じてPNLSCに身元探しを依頼した。しかし、高齢の上、体調も思わしくない。「元気な間に父の故郷を一目見たい」。母国への思いを切実に訴える。

就籍

何らかの理由で出生届が提出されず、戸籍がない状態の子供を戸籍に登録する手続き。外国で生まれて出生届が日本に届かなかった場合のほかに、妊娠後に離婚し、子供が前夫の嫡出子となることを避けるため出生届を提出せず、無戸籍になった子供などを対象にしている。登録を希望する場合は家庭裁判所に申し立て、結婚証明書や母子手帳など親子関係を証明する必要がある。